弥生時代における「定形勾玉」の位置づけ

谷澤亜里

Ⅰ　はじめに

弥生時代の北部九州地域では翡翠製の勾玉が副葬品として用いられることがあるが、そのなかには、滑らかな曲線で構成され円形の頭部にしばしば３～４条の放射状の刻線をもついわゆる定形勾玉が含まれる。このような「定形勾玉」は、当地域において、「縄文系」の勾玉を母胎としつつ楽浪郡との接触を契機に生み出されたものと考えられてきた（森1980、木下1987）。これに対し、近年、その後の資料の増加や既存資料の再検討を通じて新たな指摘がいくつかなされている（小松2011・2015、大坪2020）。本稿では、このような現状をふまえたうえで、弥生時代前・中期の勾玉を再検討し、弥生時代における「定形勾玉」の位置づけを再考したい。

Ⅱ　問題の所在

いわゆる定形勾玉の成立過程については、森貞次郎と木下尚子による研究が現在の理解の基礎となっている。弥生時代の勾玉の網羅的な集成と形態分類を行なった森（1980）は、中期前半の北部九州地域で「獣形勾玉」や「緒締形勾玉」のような「縄文系」の勾玉がみられるようになり、形態的にこれらの要素を継承しつつ、洗練された曲線で構成される「定形式勾玉」が中期中頃に出現すると指摘した。また、その出現の背景に楽浪系文物にみられる曲線文や、鋳造成形が可能なガラスという素材との出会いを想定している（森1980：pp.337-338）。

木下（1987）も、弥生時代中期に「縄文系」から「弥生系」へ勾玉が変化するという理解を提示している。そのうえで、縄文時代の勾玉と「定形勾玉」との間を介在する存在として「菜畑型勾玉（プロト定形勾玉）」を新たに設定し、菜畑型勾玉→吉武117号甕棺墓出土勾玉→宇木汲田47号甕棺墓出土勾玉という形態変化の流れを追った。また、「定形勾玉」は弥生時代中期中頃～後半の北部九州で一斉に広がると指摘し、いわゆる甕棺墓地帯の精神的統一の象徴として政治性を強く帯びた玉であったと述べている。

上の二つの論考は、「定形勾玉」出現の直前に、縄文時代的な形態の勾玉が用いられるようになることを指摘している。これらの来歴については、縄文時代の勾玉の在地での伝

世もしくは東日本での伝世品がこの時期に北部九州へと持ち込まれた可能性や（小林1967、森1980、藤田2001）、弥生時代の北部九州で縄文的な形態の勾玉が作られた可能性が想定されていた（木下1987）。この問題に関しては、その後、弥生時代の北部九州でみられる「縄文的」な勾玉の多くが施溝分割技法によって製作されたものとみられ、製作時期が縄文時代に遡るとは考え難いと指摘された（河村2000・2010）。加えて、北陸地域における翡翠製勾玉の製作状況が明確となってきたことにより、現在では、北陸での製作が確実な小型の「半玦形勾玉」を除いた多様な形態の翡翠製勾玉が、北部九州の未知の生産遺跡で作られたものと考えられるようになっている（浅野2003、高橋2010、木下2011・2013・2018、大賀2002・2004・2011・2012）。

北部九州での翡翠製勾玉の製作にあたっては翡翠素材が北陸から入手されていたと考えられることが多いが、近年、大坪志子は、北部九州出土の前期末～中期初頭の大型の翡翠製勾玉が縄文時代の大珠の再加工品である可能性を指摘した。その根拠として、吉武高木遺跡出土の翡翠製勾玉にみられる縦方向の孔（以下縦孔）や表面の窪み・刻みを、大珠として存在していたときのものとみる所見が示されている（大坪2020）。ただし、縦孔をもつ翡翠製勾玉は弥生時代中期を通じてしばしば認められ、しかも、すでに注意されるように「緒締形」や「定形」といった形式を横断して出現する（木下2011、大賀2011）。このような縦孔を全て縄文時代の大珠の再加工に由来するものと捉えてよいのかという点で、大坪（2020）の主張には再検討の余地があるように思われる。

また、佐賀県中原遺跡の調査で翡翠製勾玉が多数出土した点も（佐賀県教委2010・2011）、近年の資料状況の変化として挙げられる。なかでも、「定形」と呼べるような形態の翡翠製勾玉が中期前半（汲田式）のSJ11235甕棺墓から出土したことで（小松2011・2015）、このような形態の出現契機に楽浪郡との接触を想定することは難しくなっている点が注意される。また、翡翠製勾玉は唐津地域での出土の多さが際立ち、西九州沿岸部への分布も目立つという傾向（田平2008）からは、「定形勾玉」がいわゆる甕棺墓地帯の中枢で生まれた政治性の強い玉であるという理解にも再考の余地が出てきたといえよう。

以上のような研究の現状をふまえ、弥生時代前・中期における勾玉の形態ヴァリエーションと出土傾向の再検討を通じ、「定形勾玉」の位置づけを考えなおしてみたい。

Ⅲ　資料と方法

分析対象資料として、北部九州地域の弥生時代前期・中期の埋葬から出土した勾玉もしくは関連する垂飾として36遺跡73遺構出土の109点を取り扱う[1]（表1）。勾玉の材質には翡翠、ガラス、その他の石材があり、いずれも取り扱うが、分析の主軸は数量的に安定し

て存在する翡翠製勾玉となる。

以下では、まず北部九州で製作されたと考えられる勾玉の形態ヴァリエーションを再検討する。その際注意すべきなのは、木下（2011）や大賀（2011）が指摘するように、表面の刻線や縦孔といったいくつかの属性が、森（1980）や木下（1987）の設定した形式を横断して出現するという現象である。この事実は、孔の方向を基準に設定された河村（2020）の分類をみても明らかで、大坪（2020）が大珠からの再加工の根拠とした縦孔の評価にも関わる問題である。また、森や木下の設定した形式の分類群としての妥当性に疑問を呈する見解もみられる（大賀2004）。以上をふまえ、既存の分類に新出資料を振り分けるのではなく、資料の実態から既存の形式間の関係を考えることにしたい。

続いて、分布や共伴する副葬品といった観点から勾玉の時期ごとの出土傾向を分析する。

表 1　分析対象資料一覧

番号	遺構	点数	文献
1	阿古田SK03箱式石棺墓	1	上毛町教委 2010
2	下稗田K地区２号土壙墓	1	下稗田遺跡調査指導委員会 1985
	下稗田K地区19号土壙墓	1	
3	小倉城二ノ丸家老屋敷跡集石墓Ⅳ-1	2	北九州市教委 2012
	小倉城二ノ丸家老屋敷跡石棺墓Ⅳ-3	1	
4	慶ノ浦６号墓	3	遠賀町教委 2001
5	黒山148号土壙墓	1	岡垣町教委 1991
6	田熊石畑１号墓	2	宗像市教委 2014
	田熊石畑４号墓	2	
	田熊石畑６号墓	1	
	田熊石畑７号墓	2	
7	馬渡束ヶ浦３号甕棺墓	1	古賀市教委 2006
8	藤崎32次ST38甕棺墓	1	福岡市教委 2004
9	野方久保57号甕棺墓	1	常松 2016
10	吉武高木２号木棺墓	1	福岡市教委 1996
	吉武高木３号木棺墓	1	
	吉武高木K110号甕棺墓	1	
	吉武高木K117号甕棺墓	1	
11	岸田K0482甕棺墓	3	福岡市教委 2015
12	三雲南小路１号甕棺墓	2	福岡県教委 1985
	三雲南小路２号甕棺墓	13	
13	大坪13号甕棺墓	1	二丈町教委 1995
14	木舟・三本松43号甕棺墓	1	二丈町教委 1994
15	須玖岡本Ｄ地点甕棺墓	1	島田・梅原1930
16	安徳台２号甕棺墓	3	那珂川町教委 2006
17	隈・西小田第３地点88号甕棺墓	2	筑紫野市教委 1993
	隈・西小田第３地点19号甕棺墓	1	
18	大木７号土壙墓	2	夜須町教委 1997
19	帯田31号土壙墓	3	直方市教委 1992
20	アナフ１号甕棺墓	1	嘉穂町教委 1991
21	鎌田原３号木棺墓	7	嘉穂町教委 1997
22	藤の尾垣添14号甕棺墓	1	瀬高町教委 1988
23	礫石ASP46土壙墓	2	佐賀県教委 1989
24	牟田辺229号甕棺墓	1	多久市教委 1978
	牟田辺SJ070甕棺墓	1	多久市教委 2002
	牟田辺SJ071甕棺墓	1	
25	井ゲタSJ07甕棺墓	1	佐賀県教委 2000
26	天神ノ元３号甕棺墓	1	唐津市教委 2004

番号	遺構	点数	文献
27	中原５号甕棺墓	1	唐津湾周辺遺跡調査委員会編 1982
	中原SJ11235甕棺墓	1	佐賀県教委 2010
	中原SJ11239甕棺墓	1	
	中原SJ11249甕棺墓	1	
	中原SJ11290甕棺墓	1	
	中原SJ13082甕棺墓	1	
	中原SJ13206甕棺墓	1	
	中原SJ13232甕棺墓	1	
	中原SJ13294甕棺墓	1	
	中原SJ13312甕棺墓	1	
	中原SJ13317甕棺墓	1	
	中原SK13346土壙墓	1	佐賀県教委 2011
	中原SK13371土壙墓	2	
28	宇木汲田11号甕棺墓	1	唐津湾周辺遺跡調査委員会編 1982
	宇木汲田15号甕棺墓	1	
	宇木汲田24号甕棺墓	1	
	宇木汲田36号甕棺墓	1	
	宇木汲田38号甕棺墓	2	
	宇木汲田47号甕棺墓	1	
	宇木汲田50号甕棺墓	1	
	宇木汲田112号甕棺墓	1	
	宇木汲田119号甕棺墓	1	
	宇木汲田採集品	1	
	宇木汲田１号土壙墓	1	藤尾編 1987
29	柏崎松本３号甕棺墓	1	唐津市教委 1980
30	大友４次44号甕棺墓	1	呼子町郷土史研究会 1981
31	原の辻石田大原地区２号甕棺墓	1	長崎県教委 2007
	原の辻石田大原地区14号石棺墓	1	
32	根獅子５号人骨（箱式石棺墓）	1	坂田1973
33	神ノ崎20号石棺墓	1	小値賀町教委 1984
34	富の原Ｂ地点９号石棺墓	1	大村市教委 1995
35	景華園島田報告甕棺	1	小田・上田 2004
36	吹上４号甕棺墓	1	日田市教委 2006
	吹上５号甕棺墓	1	
	吹上２号甕棺墓	1	日田市教委 2013

「定形勾玉」の成立以降、この形式がすみやかに拡散し、材質やサイズによる勾玉の序列が成立するという理解があるが（木下1987）、その後の資料の増加を経た現在でも、このような見方が妥当であるのかを検証したい。

時間的な段階としては、甕棺墓からの出土事例が多いため、早～前期、前期末～中期初頭（金海式～城ノ越式／橋口編年（1979）ＫⅠｃ～ＫⅡａ式）、汲田式期（ＫⅡｂ・ｃ式）、須玖式期（ＫⅢａ式）、立岩式期（ＫⅢｂ・ｃ式）の５段階を設定した。この精度で時期が絞り込めない事例にも必要に応じて注意を払う。

Ⅳ　形態ヴァリエーションの再検討

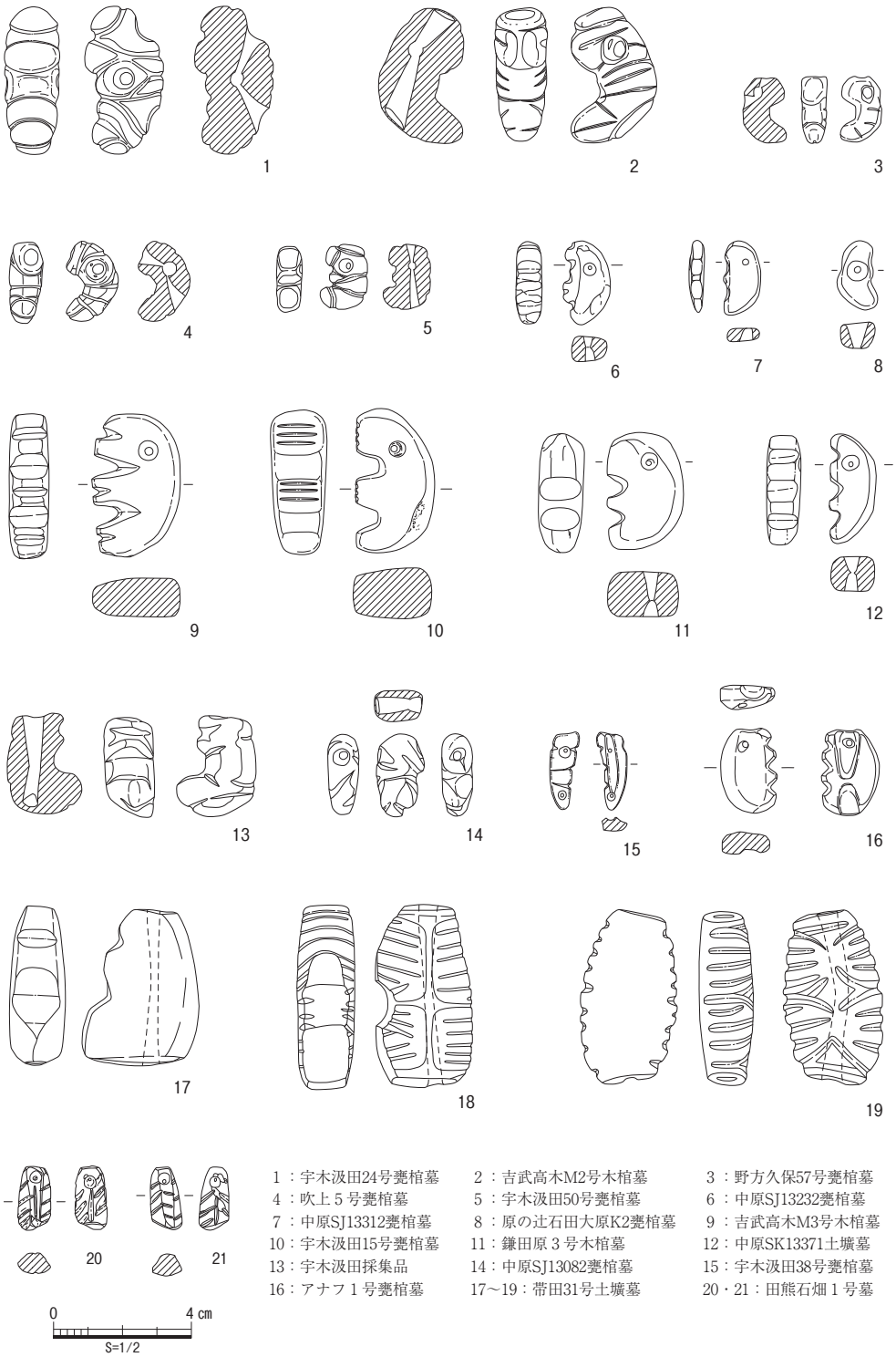
まず、北部九州で製作されたと考えられる勾玉の形態ヴァリエーションを整理し、いわゆる定形勾玉の位置づけを考える一助としたい。具体的には、大賀（2011）が「北部九州系」とする、緒締形、獣形、定形などを含む多様な形態の勾玉が問題となる。対象資料のなかでこれらに該当するものを図１～３に示した。素材には翡翠とガラスがあるが、形態が多様で存続時期幅の長い翡翠製のものから検討を行う。

図１には、いわゆる緒締形勾玉、獣形勾玉に該当する翡翠製勾玉と、その関連資料を示した。１は緒締形勾玉の典型例とされたもので、木下（1987）が指摘するように、「結縛」のイメージを具象的に表現する形態といえる。孔は中央にあけられ、これに連結する縦孔をもつことが緒締形という名称の由来となっている。２は多数の刻線を施し縦孔をもつ点が１と共通するが、頭部と尾部のつくり分けが認められる。３・４は２と類似した小型品で、３では表面の刻線の簡略化がみられる。

５は１を小型化しつつ孔を頭部寄りに施したものだが、腹部が突出して全体がＥ字型を呈す点が獣形勾玉に通じる。６は獣形勾玉に分類されようが、腹側の繰り込みと突出がやや複雑なものである。１・５・６・７の順にみると、表面の刻線でつくられた緒締形勾玉の複雑な形状が単純化・抽象化されて獣形勾玉の形態が生まれていると理解できる。

獣形勾玉のなかでも、９は比較的大型で腹側に複数の突出をもつ。この腹部の形状は、まず腹側を大きく三分割する深い刻みを施し、そのうえでそれぞれをさらに二分割することでつくりだされている。10も同様に大型でＥ字形を呈するが、腹側を大きく三分割してつくりだした突出のうち二つに各三条の刻線を施している。９と10の比較からは、10にみられるような三条の刻線が、獣形勾玉の腹部の突出をつくりだす深い刻みや抉りが抽象化されたものであることがわかる。11は腹側を三分割するのみの比較的シンプルな形状である。12のように、腹部にさらに多く分割するものもある。

13は緒締形勾玉に分類されてきたもので２・５と類似するが縦孔のみをもつ。14もこれ



1：宇木汲田24号甕棺墓　2：吉武高木M2号木棺墓　3：野方久保57号甕棺墓
4：吹上５号甕棺墓　5：宇木汲田50号甕棺墓　6：中原SJ13232甕棺墓
7：中原SJ13312甕棺墓　8：原の辻石田大原K2甕棺墓　9：吉武高木M3号木棺墓
10：宇木汲田15号甕棺墓　11：鎌田原３号木棺墓　12：中原SK13371土壙墓
13：宇木汲田採集品　14：中原SJ13082甕棺墓　15：宇木汲田38号甕棺墓
16：アナフ１号甕棺墓　17～19：帯田31号土壙墓　20・21：田熊石畑１号墓

図１　北部九州系の勾玉と関連資料（翡翠製）

と類似するが頭部の孔は通常の孔と直交する方向にあいている。17〜19は「異形管玉」として報告されたものだが、17は13の形状をシンプルにし大型化したものととらえうる（木下2018）。これをふまえると18も勾玉としての理解が可能である。表面に多数の刻線をもつが、浮彫状に大きな区画をつくりだしてその中に刻線を施す手法は２と通じる。19は抉りをもたず勾玉とすべきではないだろうが、18と近縁な垂飾としてとらえられよう。20・21も勾玉ではなく、大型の翡翠製品を二次的に分割してつくりだされた垂飾であるが（大賀2014）、表面に線刻を施す点が18・19と通じる。

15は孔を二か所もち、表面の刻線がそのまま腹部の複数の刻みにつながる。片面に縦孔の痕跡がみられる。16は腹側が四分割される獣形勾玉だが、やはり片面に縦孔の痕跡が残る。この２点は縦孔をもつ玉の再加工品としてとらえられる。

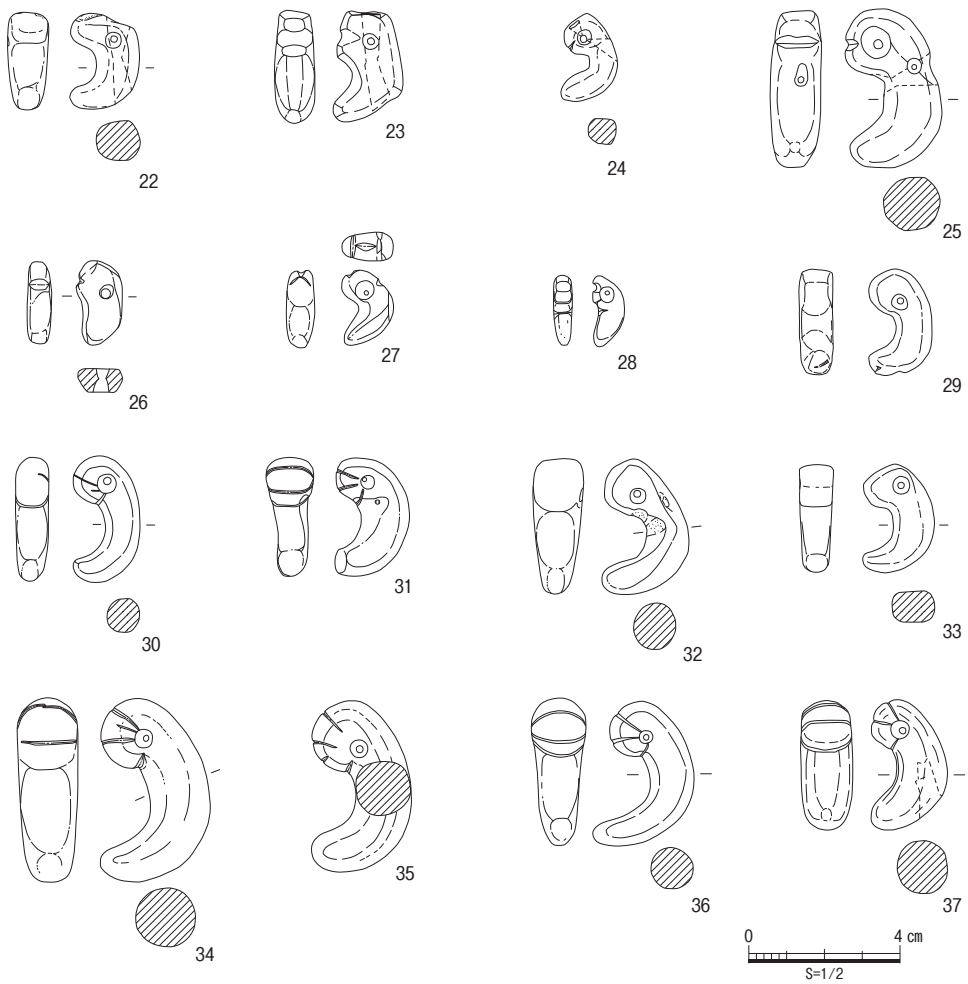
ここまでの検討から、いわゆる緒締形勾玉と獣形勾玉は、個体ごとの形態的差異は大きいが基本的には同じモチーフを表象するきわめて近い関係にあり、両者の境界がかならずしも明瞭ではないことが確認できる。この点は、木下が「縄文系勾玉は特定の認識や了解を基底にもち、それに関する何かを示した、ひとつの表現様式（スタイル）」（木下1987：p.545、傍点原著）であると述べた部分を再確認したことになる。また、緒締形勾玉を中心に縦孔をもつ勾玉が安定した量存在していることも確認できる。15・16のように再加工を受けて痕跡として残るものあるが、１〜５・13・17〜19からは玉の使用時に縦孔が実際に機能していた場合も多かったとみなせる。

図２には比較的シンプルなＣ字形を呈するが縦孔もしくは表面の刻線をもつものと、これらをもたないが全長が25㎜を超え厚みもある大型品を示した。

22〜24は縦孔をもち、２〜４から表面の刻線が省略されたものとして位置づけられよう。23・24には頭部に一条のやや太い刻みが施される。24は木下（1987）が「菜畑型」とした個体である。25は通常の孔に平行する孔をもう一か所もち、さらにこれと直交する孔をもつ大型品である。

26〜28は通常の孔のみをもつ小型品だが、頭部に刻みを施すものである。28の頭部の先端には穿孔痕があり、現在の形状は二次的加工による可能性がある。

30・31・34〜37は比較的大型で頭部に３〜４条の刻線を施すものである。31を除いて頭部と腹部の境に明瞭なくびれをもち、いわゆる定形丁子頭勾玉に該当する。なお、37は未貫通の縦孔をもち、緒締形勾玉や22〜24との類縁性が確認できると同時に（木下1987：p.581）、再加工に由来しない縦孔が存在することを示す例として重要である。これらの勾玉の頭部に施された放射状の３〜４条の刻みは、緒締形勾玉や獣形勾玉の刻線や刻みが高い抽象度でデザイン化されたものであるといえよう。木下が、「緊縛するという（緒締形勾玉と）同様の表現様式をもちながら、頭部に集約した数条の細い刻線でこれを形式化し、



22：吉武K110号甕棺墓　23：柏崎松本3号甕棺墓　24：景華園嶋田報告甕棺墓　25：富の原Ｂ地点９号石棺墓
26：中原SJ13206甕棺墓　27：中原SJ13317甕棺墓　28：宇木汲田38号甕棺墓　29：藤の尾垣添14号甕棺墓
30：中原SJ11235甕棺墓　31：宇木汲田11号甕棺墓　32：中原SJ11290甕棺墓　33：吉武K117号甕棺墓
34：宇木汲田47号甕棺墓　35：三雲南小路２号甕棺墓　36：根獅子５号人骨　37：神ノ崎20号石棺墓

図２　北部九州系の勾玉（翡翠製）

象徴性を高めたのが丁字頭勾玉である」（木下1987：p.581、括弧内筆者）と述べた点を再確認できる。

29・32・33は大型品だが頭部に刻線をもたない。頭部と尾部をつくり分けているが、全体としてややいびつな印象を与える形状である。

以上、「北部九州系」の翡翠製勾玉の形態を概観してきた。これらはきわめて多様なヴァリエーションを示すが、いずれも１のように「結縛」のモチーフを具体的に表現するものからの変形として理解することができる。ただし、この「変形」は時間的にその過程を追えるものではない。図１・２に示したものの帰属時期を表２に示した。最も古いものと

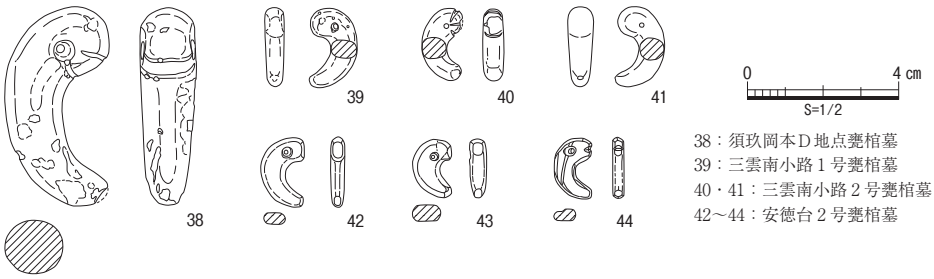


図3　北部九州系の勾玉（ガラス製）

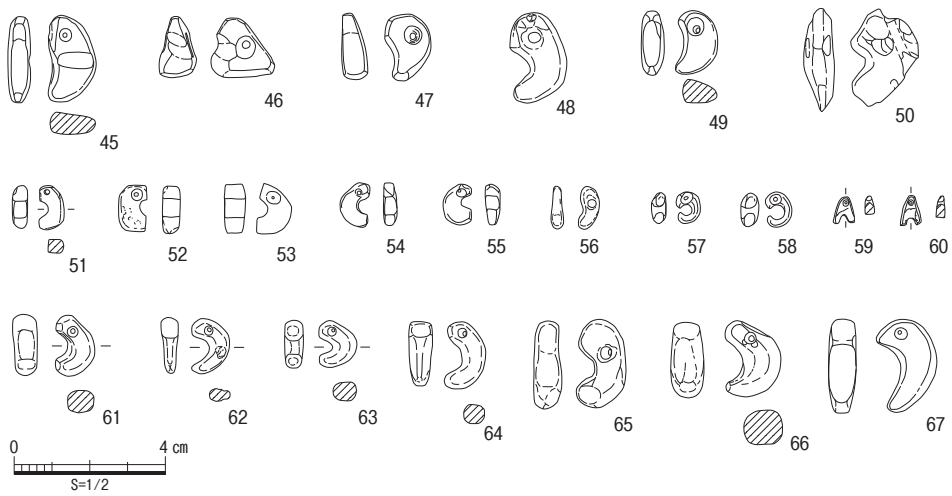
表2　北部九州系勾玉の帰属時期

	図1	図2
前期末～中期初頭	2・8・9	22・33
汲田式	3・7	30
須玖式	1・5・6・10・15	23・26・27・28・29・30・32・34
立岩式	4・14	35

して前期末～中期初頭に位置づけられる吉武高木遺跡出土品が挙げられるが、大賀（2011）や木下（2011）が指摘するように、比較的複雑なもの（2・9）と比較的シンプルなもの（22・33）がこの段階ですでに併存している。また、最も具体的な表現をもつ1は須玖式の甕棺から出土しており、時期的には後出している。したがって、「北部九州系」の翡翠製勾玉は、複雑で具象的なものからシンプルで抽象化されたものへと時間を追って変化していくのではなく、出現の当初から「結縛」のモチーフが様々な抽象度で表現されていたと考えられる。

いわゆる定形丁字頭勾玉30・34～36は、このようななかでもデザインが比較的安定した一群としてとらえることができる。最も古いものは中原SJ11235甕棺墓例（30）で汲田式段階に帰属するが、この段階はもちろん、続く須玖式・立岩式の段階に至っても他の多様な形態の翡翠製勾玉と共存している点には注意が必要と考える。

以上、翡翠製の勾玉で北部九州系ととらえられるものについて検討してきた。続いて、同様に北部九州での生産が想定されるガラス製の勾玉に目を移したい（図3）。福岡平野を中心とする地域で確認されたガラス勾玉の鋳型は現状ではいずれも弥生時代後期に位置づけられるが、製品の状況から製作時期は中期に遡ると考えられる。頭部の刻線をもたないものもあるが、形態としては明らかに定形丁字頭勾玉を指向しており（38～41）、森（1980）や木下（1987）の指摘する通り、この形態と型作り可能なガラスという素材との親和性を認めることができる。最も古いのは須玖式段階とされる宇木汲田112号甕棺墓例だが[2]、残りはいずれも立岩式段階に位置づけられる。鋳型によらず、板状のガラスを加工して製作されたとみられるものもあるが（42～44）（柳田2008）、やはり立岩式段階に位置づけられる。



45・49：大木７号土壙墓　46：大友4次44号甕棺墓　47：大坪13号甕棺墓　48：藤崎32次ST38甕棺墓
50：礫石Ａ遺跡SP46土壙墓　51：天神ノ元３号甕棺墓　52：井ゲタSJ07甕棺墓　53：黒山148号土壙墓
54・55：鎌田原３号木棺墓　56：下稗田Ｋ地区２号土壙墓　57・58：小倉城二ノ丸家老屋敷跡集石墓Ⅳ－１
59・60：田熊石畑７号墓　61～63：岸田K0482甕棺墓　64：吹上４号甕棺墓　65：慶ノ浦6号墓
66：田熊石畑６号墓　67：宇木汲田36号甕棺墓

図４　その他の勾玉と関連資料

以上の図１～３に示した資料と図示できなかった若干の資料で構成される北部九州系の勾玉とその関連資料は、本稿の分析対象資料全体のなかで５割強を占める。以下では、これらを除いた残りの資料の内容を概観しておきたい。代表的なものを図４に示した。

まず挙げられるのは、北部九州系が出現する以前にみられる翡翠製の勾玉である。弥生時代早～前期に位置づけられる翡翠製勾玉の多くは（45～48）、事例ごとの形態的変異が大きく、図１・２に示した勾玉との共通性も高くない。北陸で生産されたものである可能性も指摘されている（大賀2011）。この時期には大木７号土壙墓のように韓半島東南部からの舶載品と考えられる天河石製の勾玉もみられる（49）。なお、同じく早～前期の礫石Ａ遺跡SP46土壙墓出土の孔雀石製と報告される勾玉は（50）、現時点で実見できておらず石材については検討を要するが、少なくとも翡翠製ではないと判断した。

このほかに翡翠以外の石材を用いたものとしては、下稗田Ｋ地区２号土壙墓出土の１点が挙げられる（56）。濃緑色を呈し、大坪（2015）がクロム白雲母と呼ぶ石材に類似するが、縦長のなめらかな「く」字形を呈す形態から弥生時代の製作とみておきたい。

翡翠製だが形態的にイレギュラーなものとしては、小倉城二ノ丸家老屋敷跡集石墓Ⅳ－１出土の２点が挙げられる（57・58）。全長８～９㎜ほどの小型品できわめて丸みの強い玦状を呈するが、腹部の抉りは穿孔によってつくりだされており、円環状の製品を再加工して勾玉状に整えていることがわかる。丸玉の二次加工品であると考えたい。なお、田熊石畑７号墓出土品（59・60）は勾玉として言及されることもあるが（河村2020）、ここでは

垂飾ととらえておきたい

以上のやや特殊な個体を除いた残りの資料は、基本的にシンプルなC字形を呈する翡翠製の勾玉で、分析対象資料では38点を数える。これらのなかには北陸で製作されたと考えられる半玦形勾玉が一定量含まれる。典型的なものとしては51～55のように全長20㎜以下で両側面と腹面との境が明確な稜をなすものが挙げられるが、61～67のようにややサイズの大きいものや丸みの強いものもある。後者には北陸での製作を想定できるものと、北部九州で二次加工あるいは製作された可能性を考慮すべきものがあると考える。このような資料の確からしい製作地／加工地を事例ごとに考察することも可能ではあるが、何らかの統一的な基準を設けて截然と区別することは難しいため、ここでは無理に分類せず、今後の課題としておきたい[3]。

Ⅴ　出土傾向の変化

続いて、分析対象資料の出土傾向を時期ごとに検討し、そのなかで「定形勾玉」の占める位置を明確にしたい。図５～９には北部九州系とその他の勾玉を区別して各時期の分布を示した。図１で取り上げた関連する垂飾も北部九州系に含めてプロットしている。また、時期の絞り込みが難しいものを図10にまとめて示した。以下、共伴する副葬品や墓地の様相にも注意を払いながら各時期の様相を概観する。

まず早～前期の北部九州系の出現以前の段階では（図５）、主に玄海灘沿岸に散発的に翡翠製勾玉の副葬がみられる。大木７号土壙墓では半島系管玉（大賀2010a）と天河石製勾玉を共伴し、列島製の翡翠製勾玉と半島から舶載された玉類を組み合わせることがこの段階ですでに行われていることがわかる。玉類以外の副葬品をもつものは少ない。

前期末～中期初頭になると（図６）北部九州系の翡翠製勾玉が出現する。現状では吉武高木遺跡の青銅器副葬が集中する墓域での出土に４点が集中している。この墓域は、階層分化の結果出現した「王墓」とみる説もあるが、複数の集落から選出された代表者たちの墓でむしろ部族の共同性を確認する機能をもっていたとする説もあり（田中2000、溝口2000）、筆者も後者の立場をとりたい。勾玉は、まとまった量の半島系管玉、武器形青銅器や銅釧との共伴が確認でき、北部九州系の勾玉が集団のリーダー層の権威を表象するアイテムのひとつとして用いられていることがわかる。隈・西小田遺跡でも北部九州系の勾玉とまとまった量の半島系管玉との組み合わせがみられる。

続く汲田式甕棺段階では（図７）、翡翠製勾玉の出土事例がやや増加する。これは、馬渡東ヶ浦３号甕棺墓、天神ノ元３号甕棺墓、宇木汲田119号甕棺墓などで北陸系の半玦形勾玉がみられるようになることと連動しているとみられる。この時期は、管玉においても

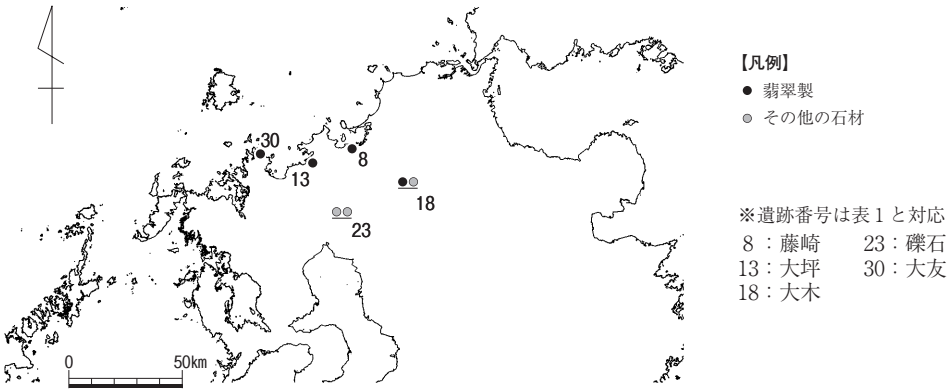


図５　北部九州における勾玉の分布（早～前期）

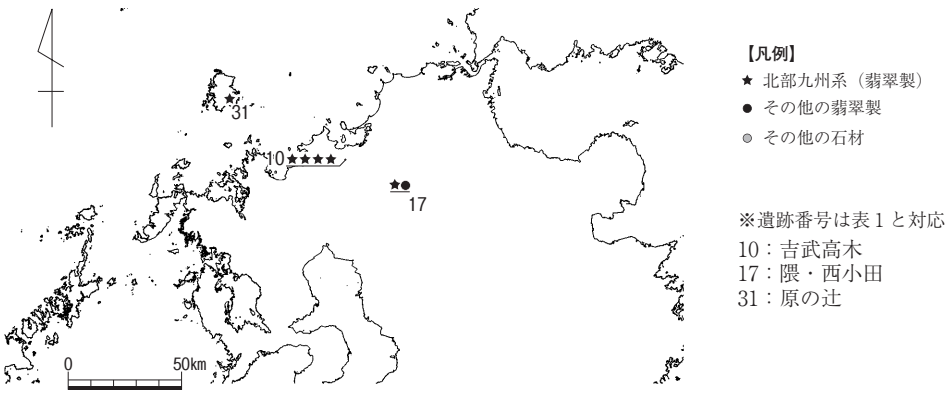


図６　北部九州における勾玉の分布（前期末～中期初頭）

北陸西部に産地が想定される「女代南Ｂ群」碧玉（藁科1994、大賀2010b）のものが激増する時期にあたり（小松2011）、これらの管玉とともに半玦形勾玉も流入したものと考えられる。上記の事例においても、女代南Ｂ群製の管玉との共伴が認められる。なお、田熊石畑遺跡４号墓、慶ノ浦遺跡６号墓、小倉城二ノ丸家老屋敷跡Ⅳ－３石棺墓などは甕棺と同水準で時期を絞り込むのが困難であったため図10に表示しているが、半玦形勾玉とまとまった量の女代南Ｂ群製管玉で構成されるという点が上記の事例と共通しており、墓域の状況からみてもこの時期に該当する可能性が高い[4]。これらの事例を加味すると三郡山地以東の沿岸部での出土が多くなり、女代南Ｂ群製管玉の分布で指摘されたのと同様に（大賀2014）、本州以東から玄海灘沿岸へと流入する経路上への分布として理解が可能である。また、共伴する副葬品に目を向けると、岸田K0482甕棺墓、牟田辺SJ071甕棺墓で武器形青銅器、馬渡束ヶ浦３号甕棺墓では銅釧との共伴がみられ、玉の入手先は前時期と異なっていながらも、副葬品としての勾玉・管玉の性格は大きく変わっていないことがうかがえる。

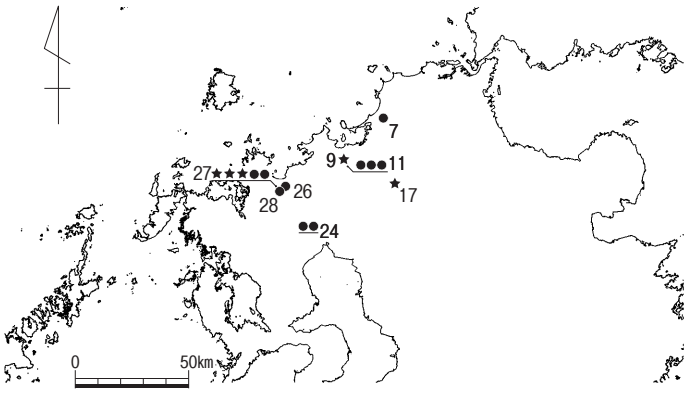


図７　北部九州における勾玉の分布（汲田式期）

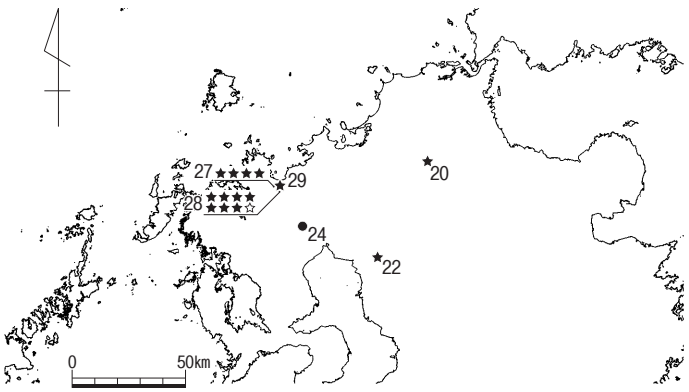


図８　北部九州における勾玉の分布（須玖式期）

北部九州系と北陸系の両方を出土する中原遺跡の様相をみてみると、この時期に青銅器を副葬する埋葬としては、銅矛をもつSJ11247と銅釧をもつSJ13134が離れて存在する。SJ11247は共伴する副葬品をもたないが、この周辺にはSJ11235、SJ11239、SJ11249、SJ11294のように勾玉を副葬する甕棺墓が集中する。このうち、SJ11235は定形丁字頭勾玉を出土した最も古い例となるが（図２-30）、勾玉を副葬する他の埋葬と墓壙の大きさなどの点に格差は認められず、この形態の勾玉がこの時期に特別に重視されていたような様相ではない。

須玖式甕棺の段階に入ると北部九州系の出土が増加する（図８）。分布としては唐津平野の宇木汲田遺跡と中原遺跡に集中し、このほかの地域でも点的に確認できる。北陸で製作されたと考えられる半玦形勾玉はこの時期の確実な例は少ないようだが、時期の絞り込みが困難だった事例のうち鎌田原３号木棺墓などはこの時期にあたる可能性が高く、流入は継続しているものと考えたい。女代南Ｂ群製管玉の流通量がこの時期にそれほど減るわけでもない（小松2011）ことをふまえると、北陸から九州への特産品の流れにおいて、翡

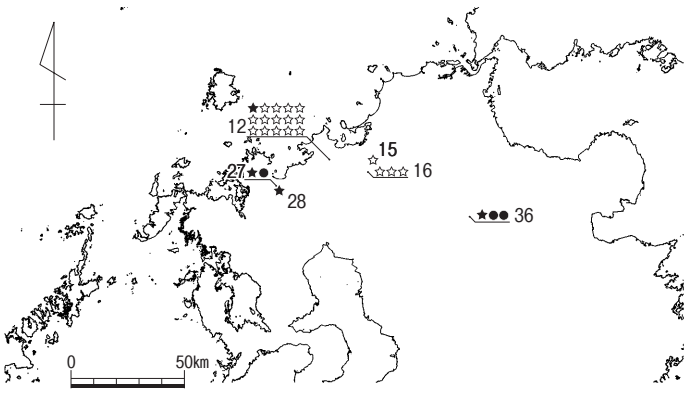


図９　北部九州における勾玉の分布（立岩式期）

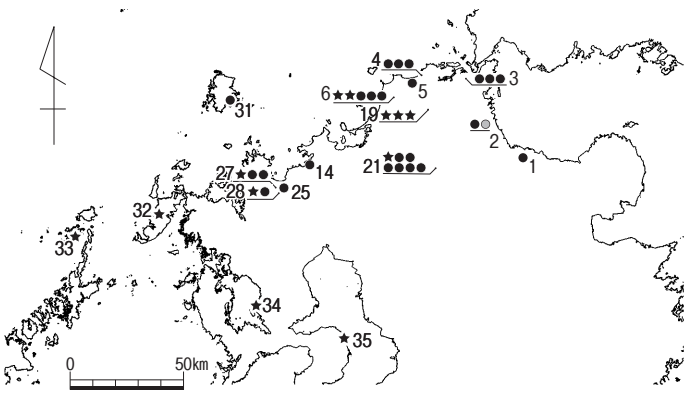


図10　北部九州における勾玉の分布（時期限定困難）

翠に関しては、北部九州系の素材になるような大型の素材の搬出量が増加したものと考えることができる。

北部九州系の出土が集中する宇木汲田遺跡、中原遺跡の様相をみてみたい。宇木汲田遺跡では、墓域の西側に青銅器の副葬が多く、墓域内での勾玉の分布も同様な傾向を示している。武器形青銅器を副葬する４基のうち11号甕棺墓は勾玉１点を副葬する。丁字頭をもつが木下（1987）は亜定形と評価した個体である（図２-31）。銅釧を副葬する２基はともに勾玉を副葬するが、38号甕棺墓は比較的小型の再加工品２点（図１-15、図２-28）、112号甕棺墓はガラス製１点となる。この墓地で最もサイズが大きい定形丁字頭勾玉（図２-34）を副葬する47号甕棺墓は、他に副葬品をもたない。同様に、緒締形の大型品（図１-１）を副葬する24号甕棺墓、獣形の大型品（図１-10）を副葬する15号甕棺墓も他に副葬品をもたない。このような分散な勾玉の保有状況は、そもそもこの時期には副葬品保有状況において格差が顕在化していないことにも起因していようが（柳田1985、中園1991）、この墓地のなかで、勾玉のサイズや形態に、埋葬の階層性と対応するような序列があった

とはいいがたい状況である。

中原遺跡ではこの時期に青銅器を副葬するのは銅釧をもつSJ13112甕棺墓のみだが、管玉のみを伴い、勾玉はもたない。また、この墓地で最もサイズの大きい勾玉（図２-32）がSJ11290甕棺墓から出土しているが、他の副葬品としては管玉を伴うのみで、サイズの大きいものがランクの高い副葬品として扱われたような様相は認めがたい。

立岩式段階（図９）にはガラス勾玉が安定した量みられるようになる。これらを出土した三雲遺跡、須玖岡本遺跡、安徳台遺跡では鉛バリウムガラス製の管玉、ガラス璧、塞杆状製品なども出土しており、この時期のガラス製品の流通状況との連動を確認できる。すでに指摘されるように、これらのガラス製品はこの時期の厚葬墓での出土が顕著である（下條1991、中園1991、小寺2006・2016、谷澤2020aなど）。なかでも最上位ランクと考えられている三雲南小路遺跡、須玖岡本遺跡では、前者で翡翠製、後者でガラス製の定形丁字頭の大型品が確認され（図２-35、図３-38）、ややランクの落ちるとされる安徳台遺跡では板状ガラスの再加工とみられる小型の勾玉（図３-42～44）、吹上遺跡では比較的小型の翡翠製勾玉（図１-４、図４-64）がみられる。大型の定形丁字頭勾玉がランクの高い副葬品として重視される傾向がはっきりと確認できるようになっているといえよう。

以上、時期を絞り込めるものを用いて検討を行ってきたが、時期を厳密には絞り込めないもののなかにも重要な資料がいくつかある。具体的には、富の原遺跡９号石棺墓（図２-25）、根獅子遺跡５号人骨（図２-36）、神ノ崎20号石棺墓（図２-37）、景華園遺跡島田報告甕棺墓（図２-24）出土品である。これらは、翡翠製の北部九州系のなかでも定形丁字頭勾玉もしくはそれに近い形態の勾玉だが、いわゆる甕棺墓地帯の中枢ではなく、西北九州の沿岸部での出土である。富の原遺跡は鉄戈、景華園遺跡は武器形青銅器を伴う甕棺墓の存在で著名な遺跡であるが、富の原遺跡で勾玉を出土した９号石棺墓は、墓域の様相からみて鉄戈副葬の甕棺墓よりも前に営まれたものと考えられる。根獅子５号人骨、神ノ崎20号石棺墓も中期前半までにおさまる可能性があり、これらの資料を、立岩式段階の福岡・糸島平野での定形丁字頭勾玉の重視と同じ脈絡で捉えるのはやや難しいように思われる。むしろ、その分布からは汲田式～須玖式段階の唐津平野における翡翠製勾玉の出土の集中との関連がうかがわれ、唐津平野から西九州沿岸部へという流通を想定することができよう。

Ⅵ　考察：弥生時代における「定形勾玉」の位置づけ

以上の検討結果をふまえ、弥生時代における「定形勾玉」の位置づけについて改めて考えてみたい。勾玉のヴァリエーションの検討から、北部九州系の翡翠製勾玉は形態が多様

であるが、いずれも、その根底において「結縛」のイメージを表象していると考えられた。縦孔や表面の刻線のように先行研究で設定された形式を横断して出現する属性もあり、須玖式甕棺段階までは、副葬時における取り扱いの差異もみられない。したがって、「緒締形」「獣形」といった形式は、勾玉の形状を記述するにあたっては有用と考えるが、当時の社会においてそれぞれ別個のカテゴリーとして認識されていたとはいいがたい。

北部九州系の「結縛」をモチーフとする形態は、先行研究も指摘するように縄文時代後・晩期の北陸・北日本出土の翡翠製勾玉に系譜をたどることができるが（河村2000・2020、木下2018）、縄文晩期後葉～弥生時代早期・前期前半が空白期となる点は大坪（2019）が指摘するとおりである。そのうえで大坪は、前期末～中期初頭の翡翠製勾玉の素材の入手について「北部九州の弥生時代の人々がすでに九州にあった大珠を再利用したのであれば」「北陸との関係を無理に考える必要はない」（大坪2020：p.586）と述べる。しかし、縦孔の出現状況をみるかぎり、前期末～中期初頭の勾玉にみられる縦孔を大珠の再加工の結果と即断することは難しく、むしろ勾玉の使用方法と関連して実際に機能を持っていた孔であると考えられる。弥生時代早～前期においても散発的にではあるが翡翠製勾玉が北部九州で使用されていることから、日本海沿岸の諸地域を介した北陸地域との繋がりは維持されていたと考えれば、北陸地域から翡翠素材が搬入されること自体はそれほど不思議ではない。むしろ問題となるのは、「結縛」をモチーフとする多様な勾玉の形態が空白期を経て再生されたかにみえる点である。この現象を積極的に評価すれば、この時期に出現しつつある青銅器を保有するような集団のリーダー層が、自らの権威を伝統的なものとして演出するために意図的に「古い」形態の勾玉を再生させた、といった解釈も出てこよう。しかし、北部九州の縄文時代晩期に主に用いられた玉類は「クロム白雲母」製でコ字形の勾玉が主体であることをふまえると（大坪2015）、弥生前期末～中期初頭の北部九州系の勾玉が「伝統的」な形態であると認識されていたかは疑問である。ここでは、北部九州系の勾玉の出現において、古い形を再生させるという意識が働いていたというよりは、その直接的な契機は不明であるが「結縛」のモチーフが再び重視されるようになったものと考えておきたい。

さて、「定形勾玉」は北部九州系の多様な勾玉の一形態として汲田式段階に出現する。須玖式段階までは、その他の多様な形態の勾玉と比べて特にランクの高い副葬品として扱われた様子はみられない。また、現在の資料状況からは、この時期は福岡平野や糸島平野というよりも唐津平野を中心に翡翠製勾玉が消費され、さらに以西の地域にも流通したものと考えられる。翡翠素材と同様に北陸地域から流通してきたと考えられる女代南Ｂ群碧玉を素材とする管玉も同様な分布傾向を示し、連動した動きと評価できる。

このような状況が変化するのが立岩式段階で、ガラス製の勾玉が増加するとともに、

「定形勾玉」の形態への指向性が明確となり、福岡平野・糸島平野の厚葬墓に大型品が副葬されるようになる。この変化の背景には、楽浪郡との接触を契機としたガラス製品／素材の流入増があると考えられる。現在では、「定形勾玉」の形態の成立自体に楽浪文物からの直接的な影響関係を想定することは難しいが、素材としてのガラスの利用の増加という点では、先行研究が指摘した通り楽浪郡との接触を大きな要因として評価できる。一方、唐津平野で翡翠製勾玉の副葬が減少している点については、この時期に女代南Ｂ群製管玉の流入量が大きく減少する（大賀2010b、小松2011）ことと明らかに連動しており、北陸を起点とする物財の流れにも大きな変化があったと考えられる。北陸地域での玉生産の消長とも関連すると考えられるが、北部九州と本州以東との土器編年の併行関係の問題も含め、今後より詳細な検討が必要であろう。先行研究では、「定形勾玉」やガラス製勾玉が碧玉製管玉を共伴しない点がしばしば重視されてきたが（木下1987、河村2020）、この時期の勾玉と碧玉製管玉の共伴例が少ないことの最も大きな要因は、女代南Ｂ群製管玉の流通量の減少にあると考えられる。

また、この時期の勾玉の材質にガラス＞翡翠の格差を想定する見解がある（木下1987、小寺2006）。一方で、翡翠＞ガラスととらえられることもあり（木下2000）、先行研究のなかでも材質の格差に関する評価は定まっていない。実際の資料状況をみると、福岡平野の須玖岡本遺跡でガラス製勾玉が用いられているのは、須玖遺跡群にガラス製品の生産工房を擁しているからであろうし、糸島平野の三雲南小路遺跡で翡翠製勾玉が用いられているのは、直前の時期まで翡翠製勾玉の分布が集中していた唐津平野との地理的な近さで説明できる。材質の違いが厳格にランキングと対応しているというよりも、それぞれの集団で入手可能であった大型の勾玉が重視されたものと考えたい。この時期の福岡・糸島平野において、緑色で大型の定形丁字頭勾玉がランクの高い副葬品として重視されたことは確かであるが、北部九州地域一円を覆うような勾玉のランキングの厳格な秩序が存在していたとまではいえないように思われる。

Ⅶ　おわりに

本稿では、弥生時代前～中期の北部九州の勾玉の形態ヴァリエーションと出土傾向を再検討し、「結縛」をモチーフとする多様な勾玉の一形態として出現し存在していた「定形勾玉」が、中期後半の立岩式甕棺段階に至って厚葬墓の副葬品として重視されるようになることを確認した。前期末～中期初頭に「結縛」のモチーフが再生される経緯や、汲田式～須玖式甕棺段階に唐津平野へ翡翠製勾玉や女代南Ｂ群製管玉が集中する背景など、明快な説明が困難な部分も残されているが、現在の資料状況をふまえたうえで、この時期の北

部九州における「定形勾玉」の位置づけを示すことができたのではないかと考える。

その後、大型の定形丁字頭勾玉を重視する傾向は弥生時代後期後半～終末期に列島広域で顕在化し、古墳時代前期の翡翠製勾玉のあり方へと継承される。この過程についても様々な議論がなされており（大賀2012、谷澤2014・2020、河村2010・2020）、特に、翡翠製勾玉の伝世の有無という問題に関しては、本稿が取り扱った資料と弥生時代後期以降の勾玉との詳細な比較が必要と考える。これについては本稿で具体的な検討を行うことができなかったため、今後の課題としたい。

謝　辞

本稿で取り扱った資料の実見にあたっては、以下の諸機関にお世話になりました。記して御礼申し上げます。

糸島市教育委員会、大村市教育委員会、嘉麻市教育委員会、九州国立博物館、九州大学考古学研究室・同比較社会文化研究院基層構造講座、（公財）北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室、古賀市教育委員会、佐賀県教育委員会、筑紫野市教育委員会、那珂川市教育委員会、日田市教育委員会、福岡市博物館、福岡市埋蔵文化財センター、宗像市教育委員会、行橋市教育委員会

註

1　隈・西小田第３地点98号甕棺墓の勾玉１点、宇木汲田遺跡76号甕棺墓の勾玉１点は詳細が報告されておらず、資料の実見も果たせていないため分析対象資料から除外した。また、宇木汲田遺跡からの採集品のうち、１点のみは形態的特徴から重要な資料と判断し、帰属時期は不明ながらも分析対象資料に加えた（図１-13）。

2　宇木汲田112号甕棺墓出土の勾玉は、唐津湾周辺遺跡調査委員会（1982）では材質が記述されていないが、九州大学考古学研究室で保管されている資料を実見しガラス製であることを確認している。

3　本稿で北部九州系として取り扱った図２-26～28のような資料も、二次加工を施されたものである可能性を考慮する必要がある。

4　慶ノ浦６号墓は石棺の覆土から出土したミニチュアの甕形土器から前期末～中期初頭に比定されているが（遠賀町教委2001）、棺内に副葬されたものではなく、玉類の構成を重視すると埋葬との同時期性には疑問がある。また、田熊石畑遺跡では、１号墓では北部九州系勾玉との関係のうかがわれる垂飾（図１-20・21）とまとまった量の半島系管玉がセットをなしており、半玦形勾玉と女代南Ｂ群製管玉が主体となる４号墓に比べて古い様相を示す（大賀2014）。小倉城二ノ丸家老屋敷跡でも同様に、丸玉の再加工とみられる勾玉（図４-57・58）と軟質緑色凝灰岩製管玉・半島系管玉からなる集石墓Ⅳ-１の玉類は、石棺墓Ⅳ-３よりも古い様相と評価することができる。この様相の差を埋葬時期の差に直結させてよいかは慎重な判断が必要と考えるが、両遺跡で前期末～中期初頭的な様相と中期前半的な様相との共存がみられることに注意を払っておきたい。

参考文献

浅野良治　2003「日本海沿岸における翡翠製勾玉の生産と流通」『富山大学考古学研究室論集蜃気楼―秋山進午先生古稀記念―』　六一書房　pp.71-83
大賀克彦　2002「弥生・古墳時代の玉」『考古資料大観』第９巻　小学館　pp.313-320
大賀克彦　2004「弥生・古墳時代のヒスイ玉文化研究の現状と課題」『玉文化』創刊号　pp.91-97
大賀克彦　2010a「東大寺山古墳出土玉類の考古学的評価―半島系管玉の出土を中心に―」『東大寺山古墳の研究』　東大寺山古墳研究会・天理大学・天理大学付属天理参考館　pp.315-337
大賀克彦　2010b「女代南Ｂ群碧玉製管玉に関する認識」『中原遺跡』Ⅳ　佐賀県文化財調査報告書第182集　佐賀県教育委員会　pp.280-293
大賀克彦　2011「弥生時代における玉類の生産と流通」『講座日本の考古学』５　弥生時代（上）　青木書店　pp.707-730
大賀克彦　2012「古墳時代前期における翡翠製丁字頭勾玉の出現とその歴史的意義」『古墳時代におけるヒスイ勾玉の生産と流通過程に関する研究』平成21～23年度科学研究費補助金 若手研究（Ｂ）研究成果報告書 課題番号21720285　冨山大学人文学部　pp.49-60
大賀克彦　2014「田熊石畑遺跡木棺墓群出土の玉類」『国史跡田熊石畑遺跡』宗像市文化財調査報告書第71集　宗像市教育委員会　pp.178-186
大坪志子　2015『縄文玉文化の研究―九州ブランドから縄文文化の多様性を探る―』　雄山閣
大坪志子　2019「九州における弥生勾玉の系譜」『考古学研究』第66巻第１号　pp.24-41
大坪志子　2020「弥生早期・前期初の玉類―弥生勾玉の系譜を中心に―」『新・日韓交渉の考古学―弥生時代―（最終報告書　論考編）』「新・日韓交渉の考古学―弥生時代―」研究会・「新・韓日交渉の考古学―青銅器～現三国時代―」研究会　pp.576-596
大村市教育委員会　1995『富の原遺跡・小佐古石棺墓群Ｂ地点Ⅱ』大村市文化財調査報告第19集
岡垣町教育委員会　1991『黒山遺跡群』岡垣町文化財調査報告書第12集
小田富士夫・上田龍児　2004「長崎県・景華園遺跡の研究」『福岡大学考古学研究室調査報告書』第３冊　福岡大学考古学研究室　pp.１-74
小値賀町教育委員会　1984『神ノ崎遺跡』小値賀町文化財調査報告書第４集
遠賀町教育委員会　2001『先ノ野遺跡・慶ノ浦遺跡』遠賀町文化財調査報告書第14集
嘉穂町教育委員会　1991『嘉穂地区遺跡群』Ｘ　嘉穂町文化財調査報告書第13集
嘉穂町教育委員会　1997『原田・鎌田原遺跡』嘉穂町文化財調査報告書第18集
河村好光　2000「ヒスイ勾玉の誕生」『考古学研究』第47巻第３号　pp.44-62
河村好光　2010『倭の玉器　玉つくりと倭国の時代』　青木書店
河村好光　2020「ヒスイ勾玉再考」『古文化談叢』第85集　pp.167-196
唐津市教育委員会　1980『柏崎松本遺跡』唐津市文化財調査報告第２集
唐津市教育委員会　2004『天神ノ元遺跡』（３）唐津市文化財調査報告書第114集
唐津湾周辺遺跡調査委員会（編）　1982『末盧国』　六興出版
北九州市教育委員会　2012『小倉城二ノ丸家老屋敷跡』２　北九州市文化財調査報告書126
木下尚子　1987「弥生定形勾玉考」『東アジアの歴史と考古』中　同朋舎出版　pp.542-591
木下尚子　2000「装身具と権力・男女」『女と男、家と村』古代史の論点２　小学館　pp.187-212
木下尚子　2011「装身具」『講座日本の考古学』６　弥生時代（下）　青木書店　pp.296-315

木下尚子　2013「弥生時代の管玉と勾玉」『日本海を行き交う弥生の宝石～青谷上寺地遺跡の交流をさぐる～』　鳥取県埋蔵文化財センター　pp.26-35
木下尚子　2018「岡山市津寺遺跡出土ヒスイ玉の位置付け」『古代吉備』第29集　pp.１-11
上毛町教育委員会　2010『垂水地区遺跡群Ⅲ』上毛町文化財調査報告書第12集
古賀市教育委員会　2006『馬渡・束ヶ浦遺跡』１　古賀市文化財調査報告書第40集
小寺智津子　2006「弥生時代のガラス製品の分類とその副葬に見る意味」『古文化談叢』第55号　pp.47-79
小寺智津子　2016『古代東アジアとガラスの考古学』　同成社
小林行雄　1967『女王国の出現』国民の歴史１　文永堂
小松譲　2011「唐津地域の弥生時代石製装身具―弥生時代中期・後期の玉作りの可能性―」『第９回日本玉文化研究会北部九州地方大会　魏志倭人伝の末盧国・伊都国―王（墓）と翡翠玉―』　日本玉文化研究会北部九州地方大会実行委員会　pp.11-40
小松譲　2015「定形勾玉の出現と成立」『末盧国　ひすいと青銅のクニ』　荒神谷博物館　pp.24-27
佐賀県教育委員会　1989『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（９）　礫石遺跡』　佐賀県文化財調査報告書第91集
佐賀県教育委員会　2000『堂の前・井ゲタ遺跡』佐賀県文化財調査報告書第144集
佐賀県教育委員会　2010『中原遺跡』Ⅳ　佐賀県文化財調査報告書第182集
佐賀県教育委員会　2011『中原遺跡』Ⅴ　佐賀県文化財調査報告書第187集
坂田邦弘　1973「長崎県根獅子遺跡の発掘調査」『考古学ジャーナル』79　pp.14-18
島田貞彦・梅原末治　1930『筑前須玖史前遺跡の研究』京都帝国大学文学部考古学研究報告第11冊　刀江書院
下條信行　1991「北部九州弥生中期の「国」家間構造と立岩遺跡」『古文化論叢　児嶋隆人先生喜寿記念論集』　児嶋隆人先生喜寿記念事業会　pp.75-106
下稗田遺跡調査指導委員会　1985『下稗田遺跡』行橋市文化財調査報告書第17集
瀬高町教育委員会　1988『藤の尾垣添遺跡』瀬高町文化財調査報告書第４集
高橋浩二　2010「翡翠半玦形勾玉の製作技術と地域性の背景」『待兼山考古学論集Ⅱ―大阪大学考古学研究室20周年記念論集―』　大阪大学考古学友の会　pp.215-230
多久市教育委員会　1978『牟田辺遺跡（第Ⅲ次）』多久市文化財調査報告書第３集
多久市教育委員会　2002『牟田辺遺跡　第Ⅳ次』多久市文化財調査報告書第29集
田中良之　2000「墓地から見た親族・家族」『女と男、家と村』古代史の論点２　小学館　pp.131-152
谷澤亜里　2014「弥生時代後期・終末期の勾玉からみた地域間関係とその変容」『考古学研究』第61巻第２号　pp.65-84
谷澤亜里　2020a「玉類からみた日韓交渉―弥生時代前期後半～後期を中心に―」『新・日韓交渉の考古学―弥生時代―（最終報告書　論考編）』「新・日韓交渉の考古学―弥生時代―」研究会・「新・韓日交渉の考古学―青銅器～現三国時代―」研究会　pp.597-613
谷澤亜里　2020b『玉からみた古墳時代の開始と社会変革』　同成社
田平徳栄　2008「九州における弥生時代ヒスイ勾玉の製作と流通について」『佐賀県立名護屋城博物館研究紀要』第14集　pp.１-22
筑紫野市教育委員会　1993『隈・西小田地区遺跡群』筑紫野市埋蔵文化財発掘調査報告書第38集

常松幹雄　2016「野方久保遺跡」『新修福岡市史』資料編考古１　福岡市　pp.282-285
那珂川町教育委員会　2006『安徳台遺跡群』那珂川町文化財調査報告書第67集
長崎県教育委員会　2007『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第35集
中園聡　1991「墳墓にあらわれた意味―とくに弥生時代中期後半の甕棺墓にみる階層性について―」『古文化談叢』第25集　pp.51-92
二丈町教育委員会　1994『木舟・三本松遺跡』二丈町文化財調査報告書第９集
二丈町教育委員会　1995『石崎地区遺跡群　大坪遺跡』Ⅰ　二丈町文化財調査報告書第10集
直方市教育委員会　1992『帯田遺跡』直方市文化財調査報告書第13集
橋口達也　1979「甕棺の編年的研究」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXXI（中）　福岡県教育委員会　pp.133-203
日田市教育委員会　2006『吹上』Ⅳ　日田市埋蔵文化財調査報告書第70集
日田市教育委員会　2013『吹上』Ⅴ　日田市埋蔵文化財調査報告書第110集
福岡県教育委員会　1985『三雲遺跡　南小路地区編』福岡県文化財調査報告書第69集
福岡市教育委員会　1996『吉武遺跡群』Ⅷ　福岡市埋蔵文化財調査報告書第461集
福岡市教育委員会　2004『藤崎遺跡15』福岡市埋蔵文化財調査報告書第824集
福岡市教育委員会　2015『岸田遺跡』２　福岡市埋蔵文化財調査報告書第1257集
藤尾慎一郎編　1987「唐津市宇木汲田遺跡における1984年度の発掘調査」『九州文化史研究所紀要』第32号　pp.１-13
藤田富士夫　2001「翡翠製勾玉」『MUSEUM KYUSHU』第18巻第２号　pp.３-10
北條芳隆・禰宜田佳男（編）『考古資料大観』第９巻　小学館
溝口孝司　2000「古墳時代開始期の理解をめぐる問題点―弥生墓制研究史の視点から―」古墳時代像を見なおす―成立過程と社会変革―』　青木書店　pp.27-48
宗像市教育委員会　2014『国史跡田熊石畑遺跡』宗像市文化財調査報告書第71集
森貞次郎　1980「弥生勾玉考」『鏡山猛先生古稀記念　古文化論攷』307-340
柳田康雄　1985「発掘された「倭人伝」の国々」『日本の古代』第１巻　倭人の登場　中央公論社　pp.189-218
柳田康雄　2008「弥生ガラスの考古学」九州と東アジアの考古学―九州大学考古学研究室50周年記念論文集―』上巻　九州大学考古学研究室50周年記念論文集刊行会　pp.254-274
夜須町教育委員会　1997『大木遺跡』夜須町文化財調査報告書第35集
呼子町郷土史研究会　1981『大友遺跡』呼子町文化財調査報告書
藁科哲男　1994『玉類の原材産地分析から考察する玉類の分布圏の研究』平成５年度科学研究費補助金（一般研究Ｃ）研究成果報告書 研究課題番号04610244

挿図出典

図１～４
１・３・４・８・10・11・15～21・23～25・29・35・37・39～41・45～66：各報告より再トレース、一部改変／２・５～７・12～14・26～28・30～32・34・67：木下（2013）より再トレース、一部改変／９・22・33：筆者実測／36：木下（1987）より再トレース、一部改変／38・42～44：柳田（2008）より再トレース、一部改変
図５～10：筆者作成